チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2013 年 12 月 8 日　(C)河北新報社

いのちと地域を守る

むすび塾@チリ・コンスティトゥシオン

地元校訪問 生徒が質問

住宅再建に関心

河北新報社と国際交流基金が南米チリに合同で派遣した巡回ワークショップ「むすび塾」の訪問団は6日（現地時間）、コンスティトゥシオン市のガブリエル・ミストラル校を訪れた。訪問団の東日本大震災の語り部2人が、生徒と教員に自らの被災体験や、復興の現状を語った。

同校と南三陸町の志津川高は、国際交流基金の事業を通じて交流。それぞれの被災体験談を基に作られた歌が、ことし2月のチリの追悼式や3月の南三陸町の追悼式で披露された。

一緒に朝食を取る形式で開かれた親睦会では、生徒や教員から「被災地の子どもたちは現在、津波とどう向き合っているのか」「なぜ住宅の再建が遅れているのか」などの質問が出た。

住宅再建をめぐり、語り部たちは被災者の数が膨大な上、浸水被害が深刻な場所には居住制限があることを説明した。震災発生から2年8カ月余りが過ぎても仮設住宅に住んでいる被災者が多い状況に、学校側の参加者は驚いた様子だった。

語り部の一人、南三陸町の農業後藤一磨さん(66)は「津波は悲しい出来事だが、世界中の人から温かく助けてもらい、皆さんにも会えた。明るい未来を切り開くために手を携えていこう」と感謝の言葉を述べた。

地元の南三陸町の現状を説明する後藤さん（右）。生徒たちは真剣な表情で聞き入った＝コンスティトゥシオン市のガブリエル・ミストラル校